

は理なり、

〔本朝地震記〕夫地といふ文字、往昔は壘に作る、これ會意なり、史記漢書に墜に作る、震は動なり亦怒なりともいへり、○中略但し地の體は北を陽とし南を陰とす、山嶽多くは北にあり、天の體は南を陽とし北を陰とす、故に日輪は南に行る、是天地圓渾相聯りし象なり、○中略されば地震するものは、陽氣陰の下に伏して陰氣に迫り昇る事あたはず、於是地裂動き震するにいたる、これ陽氣其所を失ふて、陰氣填る、が故なり、また地中に蜂の巢のごとき竅あり、しかして後水潜り陽氣常に出入す、陰陽これにて相和し、其宜を得るを常とす、もし陽氣澀滯して出ることあたはず、歲月を積重るに隨ひ、地脹れ水縮るゆゑに、井戸涸れ、時候ことの外熱氣なり、これを譬はゞ、餅を炙るに火のために脹れ起るが如し、將に地震ふときは、蒼天も卑くなり、衆星も大き常に倍するといへり、これ地昇り天降るにあらず、既に雨ふらんとするときは、山を見るに甚だ近く見るが如し、陽氣陰を伏し地を裂きて天に發出するが故に地中震動す、これ則ち地震なり、そのはじめ震ふもの甚だ猛烈なり、これ地中陽氣一塊に發するの證なり、また次に震ふものは緩なり、これ嚮の陽氣地中に残れるが少しづ、發出の所以なり、されば一天中の世界なれども、中華にふるひて本朝に動かす、日本震ひて唐土また動かす、一國中にかぎり他國に出でず、或は江戸靜にして浪花に震ひ、大坂豊にして京都うごく、是地中の陽にて地脹る、と脹ざるとの故なり、地中に凝し陽氣其所より發せんとする故に、甚だしきものは地裂山崩ること往々これあり、一村にありても、そのあたりの多少あるは、是また地の堅きと堅からざるとの故なり、凡初めて大に地震するときは、海汀に泥涌上り津浪山のごとく浜る、奥州の洪水、遠州今切など是なり、又大地震の後、月をかさねて震ひやまざるは、いまだ陽氣の出盡さる故なり、其甚きものは山焼出るといへり、